

高速戦艦「赤城」4

グアム要塞

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	マリアナの一夜城	9
第二章	グアム強襲	33
第三章	水戦飛翔	77
第四章	甦る脅威	103
第五章	立ちはだかるもの	141
第六章	霸王生誕	201

・ 沖ノ島島

マリアナ諸島

サイパン島
テニアン島
ロタ島
グアム島

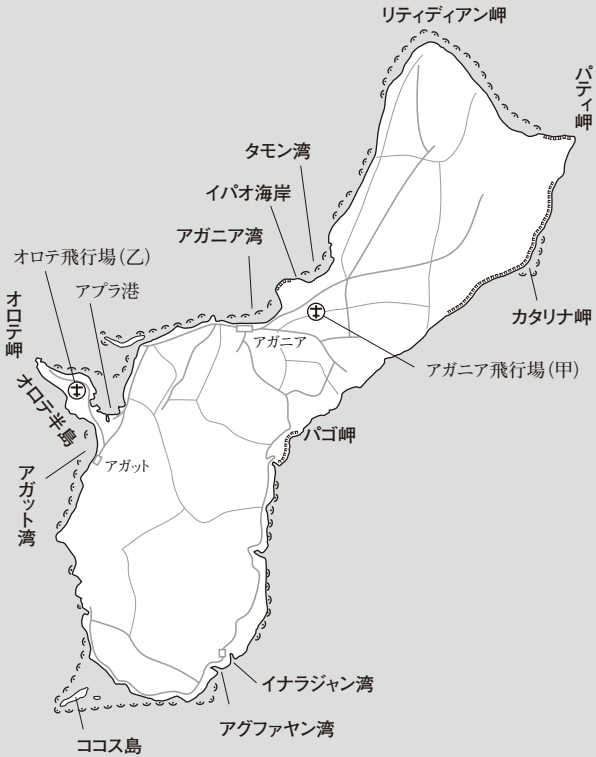
太平洋

トラック環礁

内南洋要域図



グアム島詳細図



0 5 10
km



高速戦艦「赤城」 4

グアム要塞

第一章 マリアナの一夜城

1

「目的地まで三七キロ」

「了解」

早見はやみ剛たけ海軍飛行兵曹長の報告に、一〇〇式司令部偵察機の操縦席に座る沼田隆一ぬまたりゅういち陸軍中尉は、ごく短く返答した。

早見と組んだ当初は、距離を「湮」カイリで伝えて来るため、「キロかメートルに直してくれ」と注文していたが、容れてくれたようだ。

沼田は腰を僅かに浮かせ、前方を見た。

紺碧の海原こんへきうなばらの直中に、目的地のグアム島が見える。マリアナ諸島では、最大の面積を持つ島だと聞かされていたが、今はまだ胡麻粒ほどの大きさだ。

高度計の針は、五九〇メートルを指している。亜熱帯圏ではあるが、気温は非常に低い。寒さが刃と化し、肌を突き刺すようだ。

（満州で戦った先達よりはましたな）

そんな想念が、沼田の頭をかすめた。

日露戦役の折り、帝国陸軍将兵は、厳寒期の満州でロシア軍と戦ったのだ。

戦いが終わっても、氷点下二〇度から三〇度まで冷え込む厳寒の中での野営や行軍が、いつ果てるともなく続く。

だが飛行機乗りは、地上に降りさえすれば、高空の寒さから解放される。

これぐらいで寒がっていたら、日露戦役に従軍した先達に怒られる——そう思いつつ、沼田は一〇〇式司偵を操った。

グアム島との距離が縮まり、島影が拡大する。北側からは「く」の字を裏返したような形に見える。

「西岸沖に回り込んで下さい。敵飛行場は、島の西部にあるとの情報です」

「了解した。西岸沖に回り込む」

早見の指示を受け、沼田は舵輪を僅かに右へと回

した。

（敵の飛行場は、使用可能な状態にあるのか？ だとすれば、いつの間に飛行場を修復した？）

そんな疑問が浮かんだ。

グアム島の米軍飛行場は、開戦劈頭、マリアナに展開していた第二二、二五航空戦隊が叩き、使用不能に陥れたはずだった。

その後、戦局の焦点はフィリピンにあつたため、マリアナ方面の日本軍は、グアムの米軍と睨み合うだけとなっていた。

そのグアムで異変が起きたのは、この四日前——昭和十七年五月三日のことだ。

グアム周辺の偵察に飛び立った海軍の水上偵察機が、未帰還となったのだ。

水偵が所属する海軍第二〇航空隊では事故だと考えていたようだが、翌五月四日にも、グアム近海で水偵が未帰還となった。

「我が軍が気づかぬうちに、グアムの米軍飛行場は

再建されていたのかもしれない」

マリアナ諸島、小笠原諸島の防衛を担当する海軍の第八艦隊司令部は、そのように推測し、高速の偵察機をグアム上空に派遣すると決定した。

海軍の新鋭機「二式艦上偵察機」は、機動部隊への配備が優先され、基地航空隊にはなかなか回って来ない。

旧式の九八式陸上偵察機は速力が小さく、敵戦闘機に捕捉されたら逃げられない。

そこで海軍が目を付けたのが、陸軍機の一〇〇式司偵だ。

同機は敵中深く進入し、後方における敵情を探ることを目的として開発された機体で、速度性能と航続性能が高い。

対ソ連、もしくは対中国の全面戦争が勃発した場合、満州や朝鮮半島で運用されることが想定されていたが、当面大陸で新たな戦争が始まる可能性はないと考えられたことから、陸軍も一〇〇式司偵の

マリアナ派遣に同意した。

陸軍の飛行機乗りは、地上の目標物を頼りに飛ぶ地文航法を習得しているため、目印のない海上を飛ぶことを苦手としていたが、海軍は天測航法に習熟した偵察員を後席に搭乗させること、偵察終了後はサイパン島から長波を輻射し、誘導に当たることの二つを約束していた。

サイパンに派遣されたのは、一〇〇式司偵の二型だ。昭和一五年九月に採用された一型に比べ、最高速度、航続性能共に向上している。

この五月に実用審査を終え、六月より量産に入ることになっていたが、陸軍航空本部は、

「実戦の場で用いることが、最良の実用審査になる」

との理由で、貴重な試作機と一〇〇式司偵に慣れた操縦者を前線に派遣していた。

グアムの米軍が、サイパンの第八艦隊に知られぬよう飛行場を復旧したというのは、沼田には信じら

れない。

爆撃を受けた飛行場を、再び離着陸可能とするまでに必要とされる人手と時間は、経験上よく分かっているつもりだ。

飛行場の規模や爆撃の被害状況にもよるが、壊滅状態になった飛行場を再建するとなれば、新しい飛行場を建設するのと変わらない。

そのような作業を、日本軍の目に付かぬよう、短期間で終えるなど、信じられないが――。

(行けば分かる)

そう自身に言い聞かせ、沼田は一〇〇式司偵をグアム島の西岸沖に回り込ませた。

島の大部分は、樹木に覆われている。

北部には、飛行場は見当たらないようだ。

沼田は、前方と左右に視線を転じる。

本心に敵飛行場が機能しているのであれば、いつ敵戦闘機が出現してもおかしくない。一瞬の油断が死を招く。

一〇〇式司偵は、五九〇〇メートルの高度を保ちつつ、島の西岸に沿って南下する。

紺碧の海面と緑に覆われた大地が、後方に流れ去ってゆく。

「あつた！」

伝声管から、早見の叫びが伝わった。

沼田も、グアムの地上に視線を向けた。

「あいつか」

との眩きが漏れた。

海岸付近に、三本の長い直線路が見える。

その周囲に、付帯設備と思われる複数の建造物も確認できる。

高度差があるため、駐機している航空機までは分からないが、明らかに飛行場の滑走路だと分かる。

「どうする？ 引き上げるか？」

「もう少し、南下して下さい。西岸のオロテ半島にも、敵飛行場があるかもしれません」

「分かった。もう少し、南下する」

早見の言葉に、沼田は即答した。

機体を、グアムの西岸に沿って南下させた。

ほどなく前方に、鈍のような形状の半島が見え始めた。早見が言った、オロテ半島のようなのだ。

半島の北側が港湾施設になっているのか、棧橋とおぼしき構造物も見える。

「飛行場はあるか？ どうだ？」

「ありました！ 半島の中ほどです！」

沼田の問いに、早見は大声で返答した。

沼田も、オロテ半島に目をやった。

薄緑の大地の中に、三本の直線路が見える。

うち一本は半島を縦に貫き、二本はその一本と斜めに交差している。

先に発見した飛行場より、規模が小さいようだ。

「撮影終わり。引き上げて下さい！」

早見が報告したとき、下方から複数の影が舞い上がって来る様が目に入った。

「お出迎えか！」

沼田は、吐き捨てるように叫んだ。

敵戦闘機が、迎撃に上がって来たのだ。

「逃げるぞ！」

一声叫び、沼田は舵輪を右に回した。

速度性能と航続性能の二つに重点を置いて設計・

製作されているため、旋回性能は非常に悪い。

一〇〇式司偵は僅かに機体を傾け、大きな円弧を描いて右に旋回する。

一八〇度の旋回を終え、機首を北に向けたときには、敵戦闘機は一〇〇式司偵との距離を詰めている。

機首が太く、一見空冷エンジン機のように見えるが、実際には液冷エンジンの搭載機だ。

陸軍航空隊も、海軍航空隊も、既にフィリピンで干戈を交えている。

米陸軍航空隊の主力戦闘機、カーチスP40 ユーフォーホークだ。

沼田は、エンジン・スロットルをフルに開いた。

両翼に装備する三菱ハ102空冷複列一四気筒工

エンジンが猛々しい咆哮を上げ、一〇〇式司偵が一気に加速された。

「敵機発砲！」

早見が叫ぶが、敵弾が一〇〇式司偵の機体を抉ることはない。操縦席から、火箭も見えない。

敵弾は一〇〇式司偵を捉えることなく終わったようだ。

一〇〇式司偵は、更に速度を上げる。速度計の針は、容易く五〇〇キロを突破し、六〇〇キロに迫る。コクピットの中はフル・スロットルのエンジン音と風切り音に満たされ、グアム島はみるみる遠くなくなってゆく。

「敵機、追いついて来られません！」

「あたぼうよ」

早見が興奮した声で報告し、沼田は陽気な声で返答した。

一〇〇式司偵二型の最大時速は六〇四キロ。

陸軍の最新鋭戦闘機「鍾馗」よりも速いのだ。

相手が戦闘機であっても、捕捉される気はしなかった。

「敵機、見えなくなりました」

早見がほどなく報告したが、沼田はすぐには速力を落とさなかった。

五分余り、全速での飛行を続けた後、初めてスロツトルを絞り、減速した。

巡航速度に戻したところで、沼田は呟いた。
「これで、本機の実用審査が終わったわけだ」

2

海軍第八航空隊の一式戦闘攻撃機「天弓」四二機は、サイパン島のアスリート飛行場を離陸後、高度を三〇〇〇メートルに取った。

針路は二一〇度。グアム島に直進する方向だ。

第三小隊長刈谷文雄中尉は、上空を振り仰いだ。
多数の機影が頭上に見える。

八空と同じ、第二三航空戦隊に所属する、台南航空隊の零式艦上戦闘機四五機だ。

八空の天弓と台南空の零戦が、五〇〇メートルほどの高度差を取って進撃する。

刈谷機の周囲には、自機も含めて四二機の天弓が装備する三菱「火星」一一型エンジン八四基の爆音が轟いている。

ほどなく、左前方に小さな島が見え始める。

テニアン島とグアム島の間位置するロタ島だ。海軍中央には、同島に不時着用の小規模な飛行場を設ける計画もあったようだが、グアムに敵の航空部隊が進出したとあっては、そのような余裕はない。今はグアムの敵を撃退し、マリアナ諸島の制空権を盤石のものとするのが最優先だ。

ロタ島は、すぐ死角に消える。

天弓と零戦、合計八七機の戦爆連合は、速度を変えることなくグアムに向かってゆく。

「グアムまで、約四〇浬」

「あと一五分ほどだな」

偵察員席の佐久間徳藏二等飛行兵曹の報告を聞き、刈谷は口中で呟いた。

前方には、第一、第二小隊の六機が見える。

飛行隊長の早乙女玄少佐は先頭に立ち、攻撃隊の誘導に当たっている。

(敵機は、どこで仕掛けて来るか)

刈谷は、周囲を見渡した。

米軍の対空用電探は、既に攻撃隊を捕捉しているはずだ。

敵戦闘機が姿を現しても不思議はないが、今のところ、そのような兆候はない。

天弓も、零戦も、緊密な編隊形を保ったまま、グアムを指して進撃している。

一〇分余りが経過したとき、先頭の早乙女機が大きくバンクした。

「あれか！」

刈谷は小さく叫んだ。

左前方に、目的地のグアム島が見えている。

最初は海上の小さな点にしか見えないが、接近するにつれて拡大し、海岸線もはっきりして来る。

「早乙女一番より全機へ。無線封止解除。突撃隊形作れ」

無線電話機のレシーバーに早乙女の声が響いた直後、頭上で動きが生じた。

台南空の零戦が、次々と左の水平旋回をかけ、グアム上空へと向かってゆく。

その前方に、多数の機影が見える。

敵の直衛機が待ち構えていたのだ。

「機種はグラマンか？ P40か？」

刈谷は目を凝らしながら呟いた。

どちらであつても、八空にとつては強敵だ。

重爆撃機相手には無類の強さを發揮する天弓だが、単発の戦闘機には分が悪い。現に四月二五日、硫黄島が空襲を受けたとき、第一一航空隊の天弓が多数、F4Fに墜とされている。

「敵機はP40！」

の叫びが、レシーバーに響いた。

左前方で、空中戦が始まった。

P40は猪いのししを思わせる勢いで、真一文字まいちもんじに突進する。

零戦は右、あるいは左の急旋回をかけ、P40の突っ込みをかわす。P40の側方、あるいは背後に回り込み、両翼に二〇ミリ弾発射の閃光せんこうを走らせる。

瞬またたく間に三機のP40が二〇ミリ弾に貫かれ、黒煙を引きずりながら墜落し始めた。

一機は左主翼を付け根付近から叩き折られ、錐揉きりもみ状に回転しながら墜落する。

一機は燃料タンクに被弾したのか、機首付近から火焰かえんを噴出し、飛行機の形をした炎の塊かたまりと変わる。

一機は胴体の横合いから二〇ミリ弾を喰らい、ジュラルミンの破片を撒まき散らしながら姿を消す。

零戦に格闘戦を挑むP40もある。

機体を垂直に近い角度まで倒して急旋回をかけ、

零戦の背後に回り込もうと試みるが、零戦はP40より小さな旋回半径を描き、内側へ内側へと回り込む。虎とらや豹ひょうが獲物えものの喉笛のどぶえに食らいつき、仕留しとめるように、至近距離から二〇ミリ弾を発射する。

エンジンに被弾したP40は一撃で火を噴き、コクピットを破壊されたP40は、機体の原形を留とどめたまま墜落する。

かなわぬと見て、垂直降下に転じるP40もある。

機体を横転させ、空中を滑り降りるようにして、零戦の銃撃をかわす。

全般的には、零戦が優勢だ。

天弓隊に向かつて来るP40はない。敵機は零戦との戦闘に拘束こうそくされ、天弓を攻撃する余裕はないようだ。

早乙女機は、グアム島の西岸に沿って八空を誘導している。

攻撃目標は、オロテ半島の敵飛行場だ。

二三航戦司令部が分析したところでは、同飛行場

は戦闘機用に整備された可能性が高いという。

戦闘機用の飛行場を叩くことで、以後の戦いを有利に進めようということだろう。

乱戦の巷から抜け出したのか、一〇機前後の零戦が八空に追いつき、前上方に展開した。

天弓と付かず離れずの位置を保ち、敵機に備えるつもりだ。

槍の穂先のような形状の半島が見えて来た。

早乙女機に代わり、第一小隊の二番機が、八空の先頭に立った。

嚮導機を務める平尾啓治飛行兵曹長の機体だ。

四月二五日のサイパン沖海戦まで、八空の嚮導機は真島文彦飛行兵曹長と小滝雷太一等飛行兵曹のペアが務めていたが、同海戦で二人が戦死したため、第二中隊の二番機を務めていた平尾飛曹長と大貫哲平一等飛行兵曹のペアが新たな嚮導機を務めている。「爆撃目標、左一〇度の敵飛行場。全軍、突撃せよ！」

早乙女が全機に下令した。

平尾機が速力を上げ、後続機も続いた。

八空に向かつて来るP40はない。

警戒すべきは対空砲火だけかと思つたが――。

「グラマン、右上方！」

誰かの声が、レシーバーに響いた。

刈谷が身体をこわばらせたとき、前上方に展開する零戦が動いた。

次々と右旋回をかけ、敵機――グラマンF4F「ワイルドキャット」に機首を向ける。エンジン・スロットルを開き、上昇しつつ突っ込んでゆく。

F4Fは、上昇する零戦の真上から押し被さるよう突進する。

F4Fの両翼に発射炎が閃くが、火箭に捉えられない零戦はない。

敵弾が殺到して来る前に、右あるいは左に旋回し、一二・七ミリ弾の火箭に空を切らせる。

米戦闘機が装備する一二・七ミリ機銃の間合いを

見切っているような動きだ。

先にP40に対して行ったように、F4Fの側方、あるいは後方に回り込む。

F4Fは、零戦との格闘戦に入らなかった。

猛々しい爆音を轟かせ、天弓隊に突っ込んで来た。

先頭の平尾機、後続する早乙女機が、機体を左右に振る。

F4Fの射弾は、直前まで天弓がいた空間を貫き、下方へと消える。

平尾機、早乙女機の後席から、七・七ミリ旋回機銃が発射されるが、細い火箭がF4Fを捉えることはない。一連射を放ったF4Fは、速力を緩めることなく、下方へと離脱する。

新たなF4Fが、西隆一郎大尉の第二小隊、刈谷の第三小隊に突っ込んで来る。

胴体が太く、零戦に比べれば鈍重に見える機体だが、速度性能は高い。「山猫」の機名通り、野生の獍猛な猫が飛びかかって来るようだ。

二小隊の三機が機体を振り、刈谷もそれに倣った。舵輪を左に、右にと回し、敵機の照準を外そうと試みた。

猛速で突っ込んで来たF4Fが、次々と両翼に発射炎を閃かせる。青白い無数の曳痕が、天弓に殺到する。

二小隊三番機が敵弾に捉えられ、右の一番エンジンから火を噴いた。三番機はみるみる高度を落とし、刈谷の視界から消えた。

刈谷機にも、一機が向かって来る。右前上方から、袈裟懸けにするような格好で突っ込んで来る。

刈谷が舵輪を右に回した直後、F4Fの両翼に発射炎が閃いた。青白い火箭は左主翼をかすめ、後方へと消えた。

F4Fは速力を落とすことなく、後ろ下方へと離脱する。

後席の佐久間が旋回機銃を発射したのだろう、伝声管から七・七ミリ機銃の連射音が伝わる。

「小隊長、隊列乱れます！」

佐久間が報告を上げた。

緊密な編隊形を組んでいた八空だが、F4Fの攻撃に対する回避運動のため、定位置を保てなくなった機体が多数に上っているのだ。

「一斉の投弾は無理か」

刈谷は呟いた。

水平爆撃では、嚮導機に合わせて全機が一斉に投弾するが、現在の状況では難しい。F4Fの攻撃をかわすだけで精一杯だ。

「二、三番機はどうだ？」

「本機との距離がやや開いています」

刈谷の問いに、佐久間は返答した。

「刈谷一番より二、三番。一番との距離を詰める」

「刈谷二番、了解！」

「刈谷三番、了解！」

刈谷の命令を受け、二番機の清水和則二等飛行兵曹、三番機の池田勝二等飛行兵曹が返答した。

この四月まで、刈谷の二番機は三谷勝みたにまさる一等飛行

兵曹と小岩哲夫こいわてつお二等飛行兵曹のペアが務めていたが、

二人はB17の邀撃戦で戦死したため、それまで三番

機を務めていた清水と大島哲雄おおしまてつお一等飛行兵のペアが

二番機に異動し、新たに配属された池田かわしろしゅうと兼城正

一いち等飛行兵のペアが三番機に入ったのだ。

二、三番機が接近するより早く、新たなF4Fが

二機、左上方より仕掛けて来る。

刈谷は罵声ののしを吐きつつ、舵輪を左に回すと共に、

機首を僅かに押し下げる。

F4F一番機の両翼に発射炎が閃き、青白い火箭

がほとばしるが、敵弾は刈谷機の頭上を通過する。

F4Fは、たった今自身が放った射弾を追いかけ

るように、刈谷機の頭上を通過する。

F4F二番機が、続けて突っ込んで来る。

太い機首がみるみる拡大し、搭乗員の顔までがは

つきり見える。

やられる——刈谷がそう直感したとき、F4Fの

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。